

健康文化

モノクロからカラーそしてモノクロへ

高田 健三

私が初めて自分のカメラを手にしたのは、20才代中頃（1950年中頃）である。とは言っても、仕事の上で、研究資料の顕微鏡写真を撮り、フィルムの現像をはじめ、焼き付け、引き延ばし、トリミング等、写真技術はかなり身に付いていた。当時、ニコンなどの高級機には手が届かず、ライカに似たニッカを手に入れた。勿論、フィルムの現像から引き延ばしに必要な器具類は一応そろえた。私にとって写真の醍醐味は、暗室の赤い照明の下で、現像皿の中の印画紙上に画像が現れてくる数秒間の間合いである。

初めのうちは何にでもレンズを向けシャッターを切ることが楽しくて、撮りまくったものである。私が所属していた理学部生物学教室では、テニス、野球が盛んで、時折、紅白試合をやっていたが、そんな頃のスナップ写真もその一つである。そんな或る夏の日、38℃を越す猛暑が名古屋を襲った。今と違って研究室は勿論、実験室にもエアコン等なかった時代である。“頭”も回らなければ“筋肉”も伸びきったままで仕事にならない。そこでかねがね撮影旅行の目的地として計画していた高野山に出かけることにした。

初めての撮影旅行であった。電車とバスを乗り継いでやっと高野山の霊場に降り立ったとたん、涼しい風が頬を過ぎり、木の香りが鼻を掠めた。現地に来たと言う実感が涌いた時である。霊場の中心にある金剛峯寺は、千二百年前、空海が開いた仏都であると言う。歴史を刻む木造建築物を観てまわっていると、ここは正にモノクロ映像の世界だと思った。金剛峯寺の構えは、真言宗総本山たる存在感に漲り、カメラアングルが定まらず、予想以上に時間を費やした。付近は高さ数十メートルもの巨木もある深い緑の高野槇の森である。あたりには下界の猛暑と喧噪が嘘のようなヒンヤリとした静寂が漂っていた。私の予想を遙かに超えた霊場の雰囲気には、信心の薄い私にも、科学の世界を超えた異質の精神世界を感じさせものがあつた。

第一日目は暮れて、予約してあつた或る寺の宿坊を訪ねた。通された部屋の障子を明けると、目の前に高野槇の林が迫って来た。風呂を済ませ部屋で涼んでいると、若いお坊さんが二人でお膳を運んできた。二の膳付きの精進料理で

ある。初めての精進料理と言うこともあって、頂く前にまず写真を撮ることにしたが、畳の上のお膳二客は、被写体として難物である。その時、画家がスケッチしたらどんな構図になるのかと思ったりした。

ファインダーの中の被写体はシャッターを切ったその瞬間、映像としてレンズを通して目の網膜と、同時にフィルム上にも投影される。網膜が受け取った情報は脳の視覚野を経て処理され、記憶として残る一方、フィルム上では一時、潜像として固定され、化学処理（現像、固定）すると画像としてフィルム上（印画紙上）に再現される。つまり写真は目で見た現実の記憶装置である。

“崩れ落ちる戦士”はスペイン内乱（'36）の戦線で、壕を飛び出した瞬間、撃たれて崩れ落ちる兵士の姿を、低いアングルから撮った衝撃的な一コマである。戦争の空しさ、命の儚さを強烈に訴えかける報道写真である。報道カメラマン、ロバート・キャパの網膜が捉えた瞬間の兵士の姿は、モノクロ写真の中から世界中の人々に平和を訴え続けるであろう。

撮り貯めてあるネガの中から、気に入った四つ切りの写真を、額に入れて部屋の鴨居に飾って見るのが楽しみであった。そんな或る日、東京の叔父が我が家を訪ねて来た。お茶を飲みながら雑談していると、ふと写真を見上げ、これは何の木かとか、それにしても霊地の雰囲気は伝わらないねとか、やっぱりカラーの方が良くはないかななどと、勝手な批評をされてしまった。それまで写真は“モノクローム”（白黒）と決めていた信念が、何故かグラッと来た。カラーに転向したのはそれから暫くしてからである。

アメリカの大学で研究生生活を始めた1960年代初頭は、ケネディ大統領を迎えて活気に満ち溢れていた。消費文化の大国だけあって物価が安く、カラーフィルムなどの小物はドラッグストアなどで安く手に入ったのは幸いであった。かくしてモノクロからカラーへの転換はスムーズに進んだのである。

写真専門書によると、フジは緑、サクラは青、コダックは黄を基調色にしているという。それぞれに色調に特徴があり、あれは空の色がくすんで写るとか、これは赤色が派手すぎるとか議論を楽しんでいる”街の専門家”もいたが、モノクロから転向した私には、コダクロームが好みに合っていた。色調にメリハリがあることが、カラー写真の本命だと思っていたからである。

アメリカのフィルムで“アメリカ”を撮る。これぞコダックがカラーフィルムを開発した所以であろうと、その当時、勝手に自問自答したものである。紺碧の空を背景に雪を頂く巨峰の連なるシェラネバダ山脈、スペイン文化の香りが漂うカラフルなカリフォルニア、赤い大地が限りなく続く中西部、喧噪の中に躍動感溢れる大都会ニューヨーク等々、やはりコダックの色調が似合うので

ある。しかし、オレゴン州の巨木、セコイアの森の雰囲気とは、必ずしも相性が良く無かった。これがフィルムの特性なのだろうと思った。

帰国した年（'64）は新幹線開通、東京オリンピック開催で活気に溢れていた。その勢いで日本の近代化は地方都市にも進んだと言われる。しかし、会議や学会出席のため、東京や地方都市に出かける時、車窓から眺める景色の中から、里山や田畑が消えることは無かった。私には子供の時から見続けて来た景色である。国土面積に対する森林の割合が、日本は今でも約70%で世界で2位であるということと無関係ではないであろう、1位フィンランド、3位スウェーデン、4位韓国、それ以外は皆50%にも満たない。日本人が生きてきた青緑の環境は、我々の心の故郷なのである。

国立と私立の大学を定年でフリーとなってから、家内と海外旅行に出かける機会が多くなった。振り返ってみると、友人や知人との会話の中で、海外の印象など話題に入れる程度の国々は訪ねたことになる。数年を過ごしたアメリカは別として、印象深いのは、“森と湖”の北欧諸国である。やや沈んだ青を基調にした色調が似合う世界である。沿岸部に点在する港街の背景に広がるノルウェイの森は、フィヨルドに沿い限りなく北に延びて北極圏に達する。いかにも妖精達が棲んでいてもおかしくない世界である。青緑が基調の日本のフィルムが何処まで表現出来るか興味があった。

日本画の巨匠、東山魁夷の“青の世界”は自然に対する心象風景であるという。彼が北欧四カ国を写生旅行したときの著作の中に、“私自身の心象の世界が、北欧の現実の風物の中に鮮明な姿となって浮かび上がっていた……”と記されていると言う。それは衝撃的であったらしい。森の中の妖精達、水辺に現れる一頭の白馬は、画家の心と自然との関わりの中で生まれ来る、命の一コマなのであろう。私が北欧の旅で撮った森と湖のプリントの色調は、私の記憶を呼び戻すには十分であったが、東山魁夷の“青の世界”には及ばなかった。この画家の“青”は彼の心象世界にしか存在しない“色”だからであろう。

カラー写真の出来は、季節、時刻、気象条件など自然現象が決定的な要因になる。嘗て研究交流のためオランダ、イタリアへ出張した帰路、スイス・レマン湖畔のローザンヌに、名古屋大学時代の恩師、山田常雄教授夫妻を訪ねた。尽きぬ話の中で、アルプスのいい写真を撮ろうと思ったら、少なくとも一週間以上の日時を要すると言われたことを覚えている。ベストのカメラチャンスはそうそう来ないということである。

しかし、美しい景色や、ある瞬間などを撮ったはずのプリントを見た時、目的を満足させる物は多くはない。プロの写真家でも、自信作は何十枚とか何百

枚かに一枚と言うから、素人の場合は記録で十分であると納得すべきであろう。長い人生の喜怒哀楽を、時系列順に脳細胞に“記憶”として残すことは、私には不可能である。プリントされた色彩画像は、良い悪いに関わらず記憶を呼び起こすための貴重な“気付け薬”の一つなのである。

カラーフィルムの市場性もあって、数年前からデジカメを使うようになった。今の進歩したデジタル写真技術では、画像の色調や画面の整理など調整が自由に出来る。それ故に、生命科学論文に添付するカラー写真の作成法に制限があると聞く。科学に要求される厳密性から当然のことである。昔、投稿原稿に添える写真作成に苦勞したことが思い出される。

一方、画像を調整して作者の感性や意志が加わった作品が、見る側に感動を呼び起こすとしたら、それはもはや“美術”の範疇に入る作品である。画家は感情を触発された景色や、水辺の鳥の仕草等を観てスケッチに留め、バラやフルーツ等“静物”のデッサンを描き、それを基にしてその時の情景や感情を思い起こしながら自分の絵を仕上げて行く。そう言う対比で見れば、デジカメの原画は、画家のスケッチブックやデッサン帳であり、調整して出来上がったカラープリントは、画家が描いた絵画に相当するのである。

私の知るところでは、1900年代初め頃、“記録”が主体であった写真領域に、作品のモチーフ、画像の深み、情緒性など絵画性を意識した“芸術写真”と言う作品がつくられ始めたという。嘗て、写真は美術かの論争を聞いたことはあるが、'80年代頃から新しい思考の作品がドイツで生まれ、'90年代に入ると現代美術の領域で評価され、“賞”を取る作品も出て、写真と現代美術との境界は取り払われたものと見られている。これより先、東郷青児に依って再興された二科会に、写真部が設立('53年)されたのは、当時の写真家の技量の高さと、東郷青児の審美眼の先見性を示すものであろう。

今の世の中、色の洪水に圧倒されている。写真の分野もその一つである。そんな中で、遠ざかっていたモノクロの現像、焼き付け、引き延ばし作業をゆっくり楽しもうと言う人達が現れて来たという。その記事は、赤い電球の暗室の中で、目を見張って作業をしていた若き日の自分の姿を思い出させた。しかし、いざ実行となると、それだけの根気は出そうにない。今はテレビで時々放映する、往年の名作、商船テナシティー、モロッコ、駅馬車などモノクロ映画に興味を湧く。時には、頭の中で自分の色を重ねながら観るのも一興である。

(2009. 6)

(名古屋大学名誉教授)